論説

田口卯吉の政治思想（上）

伊藤彌彦

目次

一、序
二、「保生避死」と「平民社会」

一　序

かつて『学問のすすめ』の中で福沢諭吉は、明治国家の文明開化の方針に共鳴する「洋学者流」連中の振舞いが「官あるを知りて私あるを知ら」ざる点において、却って旧来の「漢学者流」の精神構造と変りない事を問題にし、「洋学者流」に代る「改革者流」の力によって数千年来の「専制政治」が「人心に浸潤したる気風」を一掃せんことを願った。(一)「政府は唯命ずるの権あるのみ、これを諭して実の例を示すは私の事なれば、我輩先づ私立の地位を占め、或は学術を講じ、或は商売に従事し、或は法律を議し、或は書を著し、或は新聞紙を出版する」(二)（傍点、―引用者）ところにこの「改革者流」の具体的役割がある。つまり、「官」よりも先ず「私」、「国家」よりも先ず「社会」を第一

として、「社会」を充実させることによってやがて国家にも及ぶとするところに「改革者流」たる本領があるのであり、こうして彼等を通じて「今我国に於て彼の『ミッヅルカラッス』の地位に居り、文明を首唱して国の独立を維持」[三]する主体の登場せんことを福沢は切望していたのである。この類の提言は、当時の我国では未だフィクションに過ぎなかった「市民社会」を恰も実在しているが如くに想定しておいて議論を立て、それによって未来が自己充足されることを期待するという苦心を常に払わねばならなかったのであるが、もし福沢の同時代人の中に「改革者流」に相応しい実践人を探すとすれば――その様な人物は当時の社会経済的条件とのズレの故に大概悲劇的ないしは戯画的になるという帰結を伴うのであるが――田口卯吉の諸活動は一つの該当例になるのではあるまいか。

鼎軒田口卯吉は「私立に地位を占め」て、「学術」、「商売」、「法律」、「著書」、「新聞紙」の分野で倦むことを知らず、最もエネルギッシュに活動した人物であった。その行動動機は金銭欲に由来するよりもむしろ経世家として天下の経倫を念頭に置いた所から発しており、その活動の振幅は鳥谷部春汀によって「かれの特色とするところは、その生活の長さあり、幅あり、屈曲あり、……」「余が鼎軒の異彩なりと認めたるは、その一生を通じて間断なく活動し、極めて変化の多き生涯を示したるなり」と評された[四]。しかしこの「変化の多き生涯」もより深層部においてはやや単純で、一徹で、自信に満ちた、楽天的な性格及び定見によって支えられていたと思われる、だからしばしば「理想主義者」と呼ばれることはあっても「日和見主義者」と称されることはなかった。そして多彩な活動に対しては「世或は之を目して狂生となし、之を称して奇を好む人となせり」[五]（親友島田三郎の言）という風評が周辺についてまわっていた。「二本足の学者」と評して森鷗外が敬意を表したので有名なように田口の知識には「西洋」と「東洋」を押えた複合的な視野が失われていなかった。田口は学者と政治家を両立させたのであり[六]、又、ジャーナリスト[七]、実

業家、[八] 史料の編纂出版家[九]としても顕著な仕事をなした。政治家としては地主議員に対抗する都市出身代議士として地租増徴を唱え営業税の軽減を企てたことで有名であり、中立ないし小会派に所属していた。[一〇] 学者としては周知の通り、自由交易論を唱えた「日本のスミス」として、又『日本開化小史』等を著した民間の文明史家として知られる。事業活動が在野的であった如く、理論活動においても「私」を先ずに基軸に据えていた。「社会論」は展開されたが「国家論」はなかった。この「改革者流」田口をここでは政治思想史の視点から分析することを目的としている。従来田口卯吉は経済学史や歴史学の分野で研究対象とされてきたが、その経済学者として、或は歴史家としての田口像のなかに政治思想史的な意味を探ってみたいと考えている。従ってここでは主に「学者」田口の理論活動を対象とする。先ず、彼の理論のなかに示された価値範疇、価値のイメージについて検討し、次に思考様式の特質を分析することを主題としている。その他政治思想史的視角からは、経世家として、或は代議士としての田口の実践活動も無視し難い程興味深い問題である。特に内政に関する具体的政策の提言（田口は社会政策学者顔負けの都市計画案等を綿密に立てていたのである）や、外交においても経済合理主義的な国家理性を貫徹させたことによって、〃我国は「天職」としてアジア諸国を支配する〃と云う類の倫理的合理化を拒否することになった国際外交観[一一]などは特に面白い論点であるが、それらの検討は他の機会に譲ることとする。

さて、理論家としての田口の評価をめぐっては、彼の文明史又は開化史をどう意味づけ、どう史学史上に位置づけるかという問題と、スミス流の正統派自由経済学を信奉し普及に力めた事実を経済史学上どう把握するかという問題があった。先ず戦前の田口評価を概観する。史論に関しては、大正五年に「明治時代における文明史的歴史が日本開化小史に始まる」云々の溢美の辞が同書再刷に際して黒板勝美によって序されている。しかし白柳秀湖に由れば、こ

の再刷の頃から「当時の楽屋評」は粉本論争[一二]を派生させていた。そしてその「浅猿しい粉本種本の詮議」は昭和三年刊行の『鼎軒田口卯吉全集』（以下『全集』と略す）にも現れるのであった。つまり、社会政策学派の一人福田徳三の「解説」は、白柳の要約するように、バックル論、ギゾー論に気をとられて「鼎軒の『日本開化小史』の脊椎ともいうべき哲学、すなわち、彼が一つの哲学を本として、歴史を見るといふ新しい型を開いた功績に関しては一言半句も費して居ぬ[一三]」といわれる。「一言半句」とは少々大げさすぎるが、つまり福田は田口が文明史又は開化史に込めていた歴史意識を把握し損ったのである。この点、後述する森戸辰男の評価を例外として、内在的な史論の評価は十分なされなかったのである。

経済学史においては田口が『自由交易日本経済論』（明治十一年一月刊行）によって我国に正統派自由経済学を紹介し而も最後までその信奉者であったことの希少性を特筆すると同時に、それが我国経済事情の具体的問題に対しては「非現実的」であったことを指摘するという二点に於いて、陸羯南の『近時政論考』（明治二三年）以来、今日の大内兵衛、住谷悦治に至るまで異口同音に言及されてきた[一四]。

この田口の理論活動における「非現実性」の側面を注視して、これ故に理論家田口自体を軽く評価する傾向は、戦前に限っていえば、就中「社会政策学派」の学者に強かったと云えよう。今、社会政策学派の目で捕えた田口論を河合栄治郎の『明治思想史の一断面――金井延を中心として――』によって一瞥しておこう。河合はこの本で、明治二十年頃迄を支配した「自由主義、個人主義、自然主義（これは〝自然科学的に事物を眺める見方〟の意――引用者）」の潮流が退いて、代って「国民主義、国家主義、理想主義」が時代を風靡してゆく過程[一五]として明治思想史を論じた。このうち前者を代表するオピニオン・リーダーとして田口卯吉を挙げている。そして特に「経済法則」の絶対性を信奉する

田口の立場を問題にし、「若し田口氏の如く考えるならば、かゝる厳然たる法則の支配する経済社会に、国家の政策の入る余地がない」[一六]と云う。又更に史論家田口が、実は生きた歴史を把握出来ない理論家であったと論じ、「歴史を読み歴史を書いたと云うことと、歴史意識を有してゐたこととは同一ではない」[一七]と言葉鋭く論難したのであった。

現実の経済問題に対して柔軟かつ有効に政策論的に対応し得ないことを以て田口を空虚な理論家、非現実主義者と看す社会政策学派型の見解や、抑々田口の存在そのものを忘却するかに見えた大正・昭和期の論壇に対して、森戸辰男が雑誌『我等』昭和二年六月号に掲載した論文は挑戦的な反撃を試みたものであったと云えよう。この論文「文明史家並『社会改良』論者としての田口鼎軒」は、田口の理論活動を評価する上で画期的な位置を占める作品であったと思われる。

社会政策学派式の「非現実主義者」田口という烙印に対して、森戸は田口の経済理論ではなく文明史論を以て反駁を加える。マルキシズムの影響を濃厚に漂わせた森戸の分析は実際以上に田口を唯物論的に解釈し、又昭和二年頃の問題を田口の中に読み込み過ぎた嫌いはあるが、田口を「向上的ブルジョワジーのイデオロギー」と規定した上で[一八]、何よりも田口の文明論や社会論が封建社会の遺風の存続を望んだ道徳主義的権威主義を解体する清掃事業として機能したことを評価する。この点で田口は封建制遺制の打破に意欲を燃やす、アクチュアルな歴史意識に富んだ人物だったのであり、一種の「社会改良」論者に他ならなかったとみたのである。又、権力国家を無視して「商業共和国」を唱導するという「宛然クロパトキンのパン略取の一節を」想起させる「無政府主義と境を接する此の如き反政治的文明観に導く経済的進歩の強調」に対してさえ、決して空想的非現実的な漫語であったのではなく「封建の遺物たる政治的特権階級に対する思想戦」としての意味を有していたと読み込んでみせたのであった[一九]。こうして森戸は田口に再

発見の光を当て、彼の理論の中に「多くの多産的な思想の萌芽を」読みとることの必要性を強調したのであった。明治前半期に及ぼした田口の理論活動の現実的、政治的意味を初めて評価した点でこの森戸論文は戦前において政治思想史的視角を最も強く提示したものであった。その他、田口の歴史論が一つの哲学、つまり「人間の生存慾、すなはち自己保存の発展を」本として「歴史を説明しようとした驚くべき活用の才」に依って書かれた点に着目したのは白柳秀湖だけであった。(二〇)

戦後に於いては、伊豆公夫が、森戸とほぼ共通する問題関心によって、田口の史論を史学史上の画期的労作として位置づけた。(二一) つまり伊豆はマルクス主義史学の観点から、田口の史論の唯物史観的な側面を強調し、封建制イデオロギーを打破する輝かしい機能をそこに読みとった。この観点を踏まえた上で、家永三郎は「国史」と呼ばれる「官学アカデミズム」の系譜に対する「文明史――民間史学――マルクス主義史学」という「民間学派」の系列を設定して、ヨリ精密な論証を以て田口を後者の「文明史」の中に位置づけた。(二二) 又「社会学」者田口の在野性と近代性を指摘したのも家永であった。(二三) 尚、家永の議論に対しては、鼎軒も含めた明治初期の「文明史学」の中には、後年のマルクス主義史学」の貧困な歴史意識に較べられぬ程の、豊かな歴史意識と可能性が含まれていたではないかという橋川文三の疑問が発せられている。(二四)

更に、政治思想史的視点からの指摘として、『明六雑誌』創刊号の巻頭で「動もすればかの欧州諸国と比較することの多かる中に、終には彼の文明を羨み我が不開化を歎じ……」と紹介された様な「開国」後の我思想界の自信喪失の時代にあって、『日本開化小史』も亦『文明論之概略』等と同様の思想的意味を持っていたことを、津田左右吉が軽く触れており、(二五) 丸山真男は精緻に論及した。(二六) 即ち「文明の普遍性」に達する進化の過程が日本には日本なりに「内

発的」にあったことを挙証することによって「のしかゝるように眼前にそゝり立つ西欧文明の高壁の前に立つて」「福沢と同じく、田口は田口なりに、この現実に面して日本国と日本人の主体的独立を実証する課題を文明史の方法のなかでも貫こうとした」課題意識を有していたことを指摘したのは丸山真男であった。[二七] しかし同時に丸山は「有機体的『内発性』の論理の明白なきざし」を読み取って、そこに明治後期に我国の思想界に漸次明確な様相を現わしてくる「ロマン的な有機体論の内発性」の小さな芽があることを見ていた。[二八]

以上大急ぎで眺めてきた理論家田口に関する諸観点については、必要に応じて以下の行論のなかで問題にすることにする。私は、田口の一見非現実的とも見える理論活動に対して、それを彼の人間観や社会観一般の総体のなかに置いてみながら、第一には抽象化された理論レベルにおいて政治思想史的な何らかの意味が認められるのではないかと想定してみて、又第二にはその理論が当時の我国の具体的現実に対して何らかの政治意識、歴史意識の発露であったと考えてみながら検討を進めてゆきたい。その際、田口の価値イメージと思考様式の特色の二点を中心に展開するが、その前に最小限田口卯吉の半生について紹介しておこう。

田口卯吉が生れた安政二年（一八五五年）は突如来航した黒船の脅威の下に日米和親条約が締結された翌年に当り、徳川幕府がいよいよ瓦解への過程を早めはじめた頃であった。そして田口の没年明治三八年（一九〇五年）は国を挙げて日露戦争を遂行していた最中であり、我「大日本帝国」が国際的にもやっと安定した地位を確立せんとしていた時であった。つまり、この「近代国家」の急成長期に田口は生涯を送ったのであった。而も卯吉少年が満十三歳の時には自らも後に「我が戊辰の変は仏国革命より大なる変遷を誘発したり」[二九] と認めていた明治維新という単に政体のみな

らず文化も習俗も一変せる国家体制のトータルな非連続的変動を体験していたのである。我々は明治初期の華々しい田口の言論活動の動機を窺うためにも、この維新の前と後における田口の生活の差異という点にだけ限定して田口の生涯を眺めておくことにしよう。

田口家は徳川家幕臣であり、代々徒士組（目白九番組）に所属していた。卯吉の祖父慎左衛門（？―一八四〇）は儒官佐藤一斎の長子でありながら放縦にして学問嫌いであった為に田口家に入婿したと云われる謂ば、曰く付きの人物であった。この祖父の言行は絶えざる不和を組仲間との間に惹起し、家計をも悪化させたという。祖父には男児なく、娘町子が婿養子を迎えるが、二人の婿に程なく先立たれている。卯吉はこの町子と後婿西山樫郎の子であったが、父は卯吉六歳折に事故死した。以来母と老母と卯吉達との家庭には赤貧洗うが如き状態が続いた。幕臣とは云え下層士族として最底に近い生活程度であったようだ。卯吉は慶応二年「御徒士見習」として幕府に出仕したが、間もなく徳川幕府が倒れたので職業制度としての徳川幕藩体制が卯吉に与えたものはほとんどなかった。

むしろ後年卯吉はこの幕藩体制下の下層士族としての日常生活、特に「交際」の風習、を苦々しく回想していた点が注目される。曰く「幕府の末、徒士組屋鋪の風習ほど忌はしきものはなかりとはや。組頭同役などの交際は志あるもの一日も得耐えぬほどのものにして……」と。又「斯る組屋鋪の中にありて女一人にて、老母と小児とを携へ、貧困の家を継ぎ、組頭などと交際し、余を生長（マヽ）せしめられしはゝの心労のほどいか斗りならん」と回顧する。(三〇) 閉鎖的で成員が固定しお互を熟知しているような運命共同体的小集団がそこにはある。日常交際する仲間は職業上の競争者でもあり、上司は生活全般に干渉しうる恣意的権力を独占する主体でもあった。しかも武士としての体面や格式が事毎に問われるという煩瑣さが絶えず問題を複雑にするという「弊習鬱結」した生活がそこにはあった。

田口卯吉はあの『日本開化小史』の中においても主君であった徳川氏に対する批判は注意深く避け、むしろ弁護していたのであるけれど、さりとて徳川家に対して懐旧の情を感じるには余りにも若少であったのであり、深い忠誠心を示すには余りにも幕藩体制の既得権益に与る度合も少な過ぎたのであった。(三二) 後に「平民社会」を宣揚し、「貴族社会」を断然拒否したことの動機には、この幕藩体制の腐敗した習俗に対する苦々しい経験が大いに作用していたと思われる。つまり明治維新とそれにつづく文明開化への努力はこのような旧徳川体制内部にあった人間によっても担われていたのであった。

明治維新を迎えて田口家の家計は遂に破綻し、一家離散に追い込まれた。しかし卯吉に関する限り、ここで「不平士族」に転化した訳ではなかった。却って逆であって、この時初めて形骸化し鬱結していた社会制度から自由を得たのであった。この時田口は新らたに「修学」を目指す野心的な青年となって自らの人生を歩み始めていた。この目的のためには、再度徳川氏に仕えることも、大蔵省の官吏になることも躊躇せずに主体的、目的合理的な選択を行なっていったのであった。(三三) 特に明治五―七年大蔵省翻訳局上等生徒となっていた時に、後の理論活動の基となる経済学や開化史を研究していたと推定される。明治七年同省の十一等出仕として翻訳に従事することになったが、旧幕臣にとって官吏は愉快な職場ではなかった様である。「三度まで紙幣頭に逆ひしことあり、為に五年間奉職せしかども位一級にも進まざりき。」(三三) という有様であった。田口は新政府の中を自由に遊泳するには少なからず旧社会からの規制を受けていたのである。かくして『日本開化小史』巻之一を出版した明治十一年には官海遊泳から身を引いた。そしてここに民間にあって多彩に活動する「改革者流」が生れたのであった。

最後に一言付け加えておこう。河合栄治郎は新旧両世界を体験した田口をば、「過去の日本と断絶しようとしながが

ら、彼等は善き意味に於て日本人であり、其の性格に於て日本の古武士であった。口に和魂洋才を唱へずして、身自らに於て洋才を配するに和魂を以てした。此の点が明治後半期の洋学者と彼等とが区別される特徴である。彼等は洋学を活用しながら、学に対する真摯な態度や、思想に対する節操の堅さに於て、凛然たる男らしさを所持してゐた。」と評した。(三四) 確かに在野的「改革者流」を貫くためには、単なる新政府に対する反撥心だけでは不十分であり、「節操の堅さ」や「凛然たる男らしさ」などの徳が必要であったし、田口の中にはこれらの徳が確固として備っていたことも判然としている。その点右の田口評は当っている。野にあることによって「古武士」のような戦国武士のエトスが甦えったとでも云うべきであろうか。しかし又、我々は彼の「節操の堅さ」や満々たる自信を秘めた「男らしさ」を単に徳の問題、あるいはパースナリティ論のみに解消してしまってもいけないであろう。田口が明治維新という巨大な体験を経ながら身につけた価値意識や人間認識や世界観、そしてここから生れた理論に対する信奉、及び彼の思考様式の特質と、彼の人生態度とは深く結合していたことを我々は、次節以下でみてゆかねばならない。

以下の各注においては次の省略様式を用いる。

※『全集』は『鼎軒田口卯吉全集』全八巻、昭和三年版を指す。

※『東経』明一三・二・一は明治一三年二月一日発行の『東京経済雑誌』を指す。

※『伝記』は鹽島仁吉著、『鼎軒田口先生伝』明治四五年版を指す。

※発行元、出版年は特に必要がない限り記さない。

（一）福沢諭吉、『学問のすゝめ』（岩波文庫版）第四編「学者の職分を論ず」参照。

（二）同書、四六頁。

（三）同書、五六頁。

（四）烏谷部春汀、「故田口鼎軒」（『東経』明三八・五・二七、二〇～二一頁）。

（五）島田三郎、「経済策巻頭に書す」（『全集』第三巻、八一頁）。尚、山路愛山は田口の短所として「其自信に強きが為めに往々独断に流るゝことあり」という点を挙げている。（「明治文学史」、山路愛山『史論集』、みすず書房編所収四二七頁）。「奇狂」の風評はこの「自信」と少なからず関連していたのである。

（六）しかしこの点に対して島田三郎は、「田口は学者たるべく余りに政事家であり、政事家たるべく余りに学者であった」と評したという、嘉治隆一「田口卯吉」、（『三代言論人集』第五巻所収）より再引用。だがこれは、学者田口の中にも「政事家」が生きており、政事家田口の中にも「学者」がいたと解釈することも出来る。この種の視野の複合性は、専門化、分業化の進行に対応して知性もパースナリティーも断片化していく時代（明治三〇年代であろうか？）以前に存在していたところの、トータルな世界像を持ったトータルな人物像をしのばせる。

（七）明治一〇年には、沼間守一の嚶鳴社の創立発起人の一人に加っていた。又明治一二年、英国の「エコノミスト」に匹敵する経済雑誌を我国でも刊行するという大抱負をもって、渋沢栄一、益田孝らの援助に依って、経済雑誌社を創立、ジャーナリストとして自立した。以後死ぬまで『東京経済雑誌』の執筆、発行に従事した。

（八）実業家としては、株式取引所重役、両毛鉄道を発案、建設するなどの経歴がある。更に非常に不評を買った事業としては、植民地を発見する目的で船を仕立てて南洋諸島に出掛けた試みがある、奇行と評された。又「経済学協会」を起こし、経済知識を経済界の諸問題の解釈、分析に用いる場を設けた。彼の行なった事業は彼の信奉していた経済学の実践演習の領域内に位置づけられる。逆に云うならば田口における経済学とは経世の学であった訳である。

（九）田口は赤字を覚悟の上で日本史の基礎資料を出版した。それによって『群書類従』、『国史大系』（正、続）『徳川実紀』、『続徳川実紀』等の膨大な史料が活字になり、その恩恵は今日にまで及んでいる。その他『大日本人名辞書』『泰西政事類』も製作された。多忙な諸活動のなかでこの種の労と精緻とを要する史料保存に本格的な関心を寄せていたことは彼のパースナリティーの不思議な一面をなしている。尚、出版事業に関しては、昭和女子大編、『近代文学研究叢書』、第八巻、「田口卯吉」の項に簡潔にして能筆な紹介がある。

（一〇）東京府会議員を明治一三～二三年の間に経験。第三回総選挙（明治二七年三月）で東京八区から衆議院議員に選出され、以後終身議席を失わなかった。他に東京市会議員も務めた。党派色は、人的にはヨリ改進党と親しく、主張としてはヨリ自由党に近かった。第二次伊藤内閣の際、一時進歩党（松方）に所属していた他は中立又は小会派を通した。小会派とは一時

院内に「帝国財政革新会」を組織したことで、これは国庫財源の正常化を推進させる為の結社であった。つまり議員としての田口は経済合理主義的判断を基準に立てており、ロマン主義や道学モラリズムの要素から遠く隔っていたことの一端がここにも窺われる。田口の議員歴、党派歴、議会活動については、『伝記』、五一〜八七頁参照。

（一一）　田口卯吉「対外国是」（『全集』第五巻）

（一二）　この紛本論争は『日本開化小史』が新井白石、或いはバックル、ギゾーのどれを祖述したか等を詮索したものである。白柳秀湖「明治の史論家」昭和九年（『明治文学全集』77　明治史論集㈠　筑摩書房）。黒板勝美「解説」（『全集』第一巻）。福田徳三「解説」（『全集』第二巻）。

（一三）　白柳秀湖、同論文、四三三頁。

（一四）　陸羯南、『近時政論考』、明治二三年、（『羯南文録』一二二頁）。本庄栄治郎、『日本経済思想史研究』、一七〇頁以下。野村兼太郎、「明治初期経済史研究」昭和一二年、（慶応大学経済史学編、『明治初期経済史概説』）。瀧本誠一『経済史研究』、昭和五年、三五頁以下。矢島祐利・野村兼太郎編『明治文化史』第五巻　学術編、昭和二九年、五四四頁以下。住谷悦治、『日本経済学史』昭和三三年、一二九頁以下。大内兵衛「解説」（『全集』、第五巻、及び第六巻）、及び同著、『経済学五十年』三三頁以下、二一四頁。

（一五）　河合栄治郎『明治思想史の一断面――金井延を中心として――』昭和一六年、日本評論社版、七〜八頁。田口と「社会政策学派」との対立は、田口が明治二四年の職工条例の制定を必要なしとした時から起った。ドイツ留学によって得た社会政策学の知識を我国にて実行しようとした若き金井延らの前に立ちはだかった「当面の相手」は正統派経済学者田口だった訳である。つまり明治二〇年代以後の経済政策をめぐる同時代的競争者として金井らは田口を目したのであり、この立場から田口の論説を全面否定しようとしたのである。河合栄治郎、同書一七二〜一七四頁参照。

（一六）　同書、二〇〇頁。

（一七）　同書二〇〇〜二〇一頁。しかしこの河合の指摘は、田口に現実性があるか無いかという問題を別にして、田口の開化史論の文体に対しては半ば当然に出てくる批判と思われる。この論理学に長けた「数学的の脳髄」には「詩人的の識認」（いずれも愛山の評による、前掲論文）が欠けており、「人間くさい」歴史をそこに望みえなかったからである。

（一八）　森戸辰男、「文明史家並『社会改良』論者としての田口鼎軒」（『我等』九巻五号、昭和二年六月、一〇〇頁）。

(一九) 同論文、一一六頁。
(二〇) 白柳秀湖、前掲論文、四三四頁。
(二一) 伊豆公夫、『日本史学史』、昭和二二年。
(二二) 家永三郎、『現代史学史批判』昭和二二年。同著『日本の近代史学』昭和三二年。同著「啓蒙史学」(『明治文学全集』77明治史論集(一)筑摩書房)。
(二三) 家永三郎『近代精神とその限界』
(二四) 橋川文三「歴史意識の問題」(『近代日本思想史講座』第七巻 近代化と伝統、筑摩書房)
(二五) 津田左右吉「福沢・西・田口——その思想に関する一考察」昭和二六年、(『文学に現はれたる国民思想の研究』第五巻付録四)
(二六) 丸山真男「近代日本における思想史的方法の形成」昭和三六年、(南原繁先生古稀記念『政治思想における西欧と日本』(下))
(二七) 同論文、二八二頁。
(二八) 同論文、二八三〜二八四頁。
(二九) 田口卯吉、「変遷の大勢」(『全集』、第二巻、五二九頁)。
(三〇) 田口卯吉、「自叙伝」(『全集』第八巻、八二頁)。
(三一) 徳川家に対する田口の忠誠観を他の旧幕臣出身ジャーナリストと比較してみると、栗本鋤雲(一八二二年生)や成島柳北(一八三七年生)の強固な忠誠心とは全然異った、遙かに自由なものであった。むしろ島田三郎(一八五二年生)と類似しており、世代として旧い忠誠観から自由な位置に属していたと云える。沼間守一(一八三九年生)や乙骨太郎乙(生年不明)らは、世代としても忠誠心の程度としても、その中間に所属していた。勝海舟に対して示す態度が旧幕臣の忠誠観の識別の指標の一つになるが、栗本鋤雲などは勝に遇う度に「よくも平気で俺の顔を見られるな」と言ったという。田口は勝の大器振りを激賞して、西郷、大久保と並べて三傑とした。「伯の人物他に異る所以は其意見世人に超越し、」とする一方、幕府に対しては「徳川氏の倒るゝは命なり、民は苦しむべからざるなり。」と言切っている。もっとも徳川家自身に対しては、開国に至るまでの政治的過程を適切に決断することによって流血をみない変革を遂げさせた功を以て、『日本開化小史』の

なかで賞讃している。このように徳川氏の英断を新文明の創出と連関させて評価することによって、田口は自己の忠誠心の分裂を回避したのであった。ともかく田口の意識は新時代に向つていたのであり、旧い忠誠観に殉ずることを形骸的と感じ、新しい価値観を持って実質的に判断を下す世代に生れていた。維新の時、彰義隊参加を申し出たが、幼年の故を以て義兄に止められたことはあったけれども、この事件を以て熱列な忠臣とみる見方（嘉治隆一）を私はとらない。しかし忠誠観が自由であったとは云え、福地桜痴（一八四一年生）のように政府の御用記者になる場合とは区別される。福地の薩長論に対しては田口は批判的であった。

旧幕臣の忠誠観については、大田原在文、『二十大先覚記者伝』、津田左右吉、「君臣関係を基礎とする道義観念」（『文学に現はれたる国民思想の研究』第五巻）参照。田口の忠誠観については他に、「勝海舟伯」（『全集』第八巻）、『伝記』、及び嘉治隆一の前掲論文参照。

（三二）　例えば義兄木村熊二宛の次の書簡は田口が動乱期に工夫した修学戦術を良く示してくれる、「東京修学相願候処、種々細故有り、一先差留相成、就而は種々熟考仕候処、林氏は固と英医を兼ね知る者に非ず、されば英医を兼学ぶ事難し、……今日之計先ず当学校（徳川氏学官林硯海が静岡に引上げた徳川氏の下で開いていた静岡病院学校のことで田口はそこに在籍していた―引用者）に出、三四等の官位を得、得而後東出せん未晩也。且林氏を脱する此挙に在りと存し……」と。（明治四年三月二六日付、『全集』第八巻、五八八頁）。又この為には母姉のみとなってしまう田口家を残してやがて単身上京する決断も下す、「我家を離す、家兄に悖る万々、陳謝すべき様なし、但々憐察を懇布す」（明治六年六月五日、在米留学中の木村熊二宛、『全集』第八巻五九〇頁）。

尚、田口の主たる修学歴は次の如くであった。

幼年期、経書素読。
明治二年、沼津小学校。
明治二―三年頃、沼津兵学校で孫氏と仏式体操。乙骨塾で乙骨太郎乙から英語。中根塾で中根香亭より漢文。
明治三―四年、静岡病院学校。
明治四年、共立学舎（尺振八につく）。
明治五―七年、大蔵省翻訳局上等生徒。

（三三）田口卯吉、「自叙伝」（『全集』第八巻、八五頁）。
（三四）河合栄治郎、前掲書、三五八～三五九頁。

二　「保生避死」と「平民社会」

経世家田口卯吉の多彩な活動の基底をなしたものとしての、又それ故に諸活動の動力因をなしたものとしての彼の価値範疇、価値の根本イメージを田口の経済論や文明史論のなかに探ぐり、その政治思想的な特色を検討することがこの節における目的である。その際、「保生避死」と「平民社会」の人間観、社会観が主たる考察の対象となる。

周知の通り『日本開化小史』や『自由交易日本経済論』に代表される文明史論や経済論のなかにおいて田口卯吉が並々ならぬ関心を注いだ問題の一つは、「貨財」を増殖し、人民に公正で豊かな生活をもたらすという問題であった。或いは又揮毫の際には田口は好んで「生財有大道」の字句を選んだという。田口の理論活動に横たわる価値イメージの探究を我々は差し当りこの「貨財」のあたりから始めることとしよう。しかしこのような財産の畜積に対する積極的な評価とそれの理論的考察ということだけであれば既に幕末の思想家（例えば本多利明や佐藤信淵の富国強兵論）の中にも現われていたのであるが、田口の場合、「貨財」の周辺には常に「生存」「保生避死」「私利心」「人欲」「自愛」「労働」「平民社会」等の言葉が内的連関性をもって結びつけられていた所に文字通り隔世の新らしさがあったと云える。端的に云うならば、殖財は国家の経倫の為になされるのではない、先ずもって「私」の生存の為の必要事として規定されたのである。而もその事こそが実は真の経世済民の学の基をなすと説かれたのであるから、徳川身分制社会の教学イデオロギーに親しんでいた人々の金銭観、財産観に大きな衝撃を与えるに十分であったと云えよう。この

点、田口の「貨財」「富」の定義のうちには単なる貨幣・財産以上の広い意味が含まれていたことに我々は注意しなければならない。つまり「貨財」の一層奥には人間の「生存」という価値が一心同体のものとして据えられていたという意味である。田口がこれを人間行動の原動因と看して「保生避死」と称していたことはよく知られている。田口の理論活動を支える論証以前の前提がここにあったのであり、又これは田口における価値の根本範疇の所在を示したものであった。さてこの「保生避死」の実質的内容と、ここから如何にして社会理論を演繹していったかという点は興味ある論点であり以下で考察することとするが、その前に今少し詳しく田口の「貨財」概念を眺めてみておこう。

鼎軒は「富」を「メンタル・サイアンス」の対象である、とした。(一)「メンタル・サイアンス」とは現代語に直すならば差し当り「人間科学」とでも云うべきものである。つまり、道徳学を適用しようとする論者に対しては「学問（サイアンス）」である点を強調し、自然科学的に把握しようとする者に対しては「メンタル」つまり「人間科学」を以て応酬するのであった。

明治の実業界では、例えば渋沢栄一が大真面目で「論語算盤説」や「義利両全」説を唱導して心服者を集めていたところからも解るように、所謂「道徳経済合一主義」（長幸男）(二)は歓迎されていた。身分制社会を支配していた金銭蔑視の意識と習慣が残存する世間で、巨大な畜財活動を開始した渋沢らにとっては営利行為の道徳主義的合理化の動機が強く作用していたと云えよう。しかしこの種の儒教の転釈によって金儲けを合理化する態度と田口の財産観とは最も縁遠いものであった。彼は「富」を道徳学から峻別した。「富」は人間が現象させた「事実」なのである以上それに対しては「自然の理法を説き明かす」「学問（サイアンス）」を適用すべきである、「聖人の教、賢人の訓、孔子の教、耶蘇の教とか」、は「斯うしろの、ああしろの」と説いた「教」「訓言」、つまり当為規範であるから、「サイアンス」の領

域たる経済学からは追放されねばならぬ、と主張したのであった。(三) この様に田口において「貨財」概念は「サイアンス」の対象として非道徳化され、又それによって人間の道具としての性格をヨリ高めたのであった。

しかし又、田口の「貨財」増殖に対する関心は、あの「殖産興業」という明治国家の産業保護政策のスローガンに応答しながら、とにかく絶対量としての貨財の増殖、即ち資本の原始的蓄積、に腐心し、同時にその過程で私腹を肥やしていった「政商」型富豪の財貨に対する関心とも、異質なものであった。田口の「富」「貨財」はもっと身近かな「私」の「生存」に発する関心であり、所謂「下から」のものであった。そして「富」は「サイアンス」の対象とはなったものの、未だ非人格的な対象物として人間から独立分離した客観的事実になってはいなかったのである。これが「フキシカル」ではなく「メンタル・サイアンス」と称する所以であった。そして西欧経済学者と田口との分岐点もここに由来していた。「欧州の経済学者は富を以て唯貨物にのみ用ゆべき語なりと釈義し」(四)たのに反対した田口の定義は遙かに広い。彼は「富」を「人為の現象」則ち人間が手を下す全活動に対して認める、つまり「凡そ人の労作考究する所必ず宇内に現象を生ず」(五)るものである以上、単に金銭財物のみならず、「物質の形状」にも「無形」の蓄積にも「富」を見出すのであった。だから時には「現象の蓄積」を「現象の富」(六)とさえ呼んでいた。この様にあくまでも人間活動と密接に結びつけて、人間論の枠内に「富」を位置づけていたのであった。

この「私」の生存から発し、人間から分離していないもの、又「下から」のものと云う点では田口の財産観は西周のそれと親近性を有していたといえる。かつて家永三郎は『人生三宝説』の中において西周が説いた「第一ニ健康(マメ)、第二ニ智識(チエ)、第三ニ富有(トミ)」という範疇と田口との間に「史的唯物論の傾向」という共通性を読み取ろうとしていたけれども、(七) むしろ西の「富有(トミ)」と田口の「貨財」との間には財産というものを「マメ・チエ」との同系列に列べておい

て、諸個人の日常生活の手段と密着したところの概念として把握した点においてヨリ根元的な連関が存在していたのであった。この側面は『学問のすゝめ』や『被抑出書』にみられる財産観とも一脈通じており、明治啓蒙思想に共有されていたものといえるのではあるまいか。田口の「富」を非人格的な「貨物」と結びつけすぎる時、家永説の様な誤解は生じたのである。確かに儒教教学イデオロギーとの比較において云うならば、それは唯物論に近づいているには相違ないけれども、ヨリ重要な点は、「富」をあくまでも「生存」と密着させながら人間論の枠中に留めて理解していたことであった。従って絶対量としての財貨の蓄積を只管企るという考えは田口には生じなかった。又啓蒙思想家の中でも福沢諭吉は「文明」を抽象的精神的なものと具体的器具制度とに分けて、後者はあくまでも人間の利用する非人格的な道具に過ぎず前者の前には「虚飾」に過ぎぬことを認めた。だから経済に対して福沢は「人力を以て徒に人間の需要を増し、表食住の虚飾を多くするの意」(八)と露に語っていたのであるが、「富」を人間と直結させした田口にはこの種の見方は全くない、彼においては「貨財」は「虚飾」ではなく、人間活動を表象する「実質」、さらにはそれを可能とするメカニズムを備えた「開化社会」の実態を表象するものであった。

結局、田口において「貨財」は非道徳化され「サイアンス」の対象とされていたけれども、未だ人間から分離した疎外物として規定されてはいなかった。これ故に、伝統的習俗にみられた金銭に対するパリア的蔑視からも、或はまたその裏返しとしての道徳的粉飾からも自由であると共に、「政商」の如くマモンへの惑溺にも陥ることのない健康さを保ちながら、田口は財産を客体化しつつ同時に人間の生存を支える手段たる「実質」として定立し得たのであった。明治以来の大日本帝国の資本制が一方では富に対して道徳イデオロギーを以て粉飾を行ないながら、他方では富の非人格化を推進させた同時進行的過程であったことを想起するならば、「私」的「生存」を「下から」支える手段

としての非道徳的な「富」を定義付けたことの意味は極めて希な、そして貴重なものであったと云えよう。

さて本論に戻ろう。田口は人間をどう規定したか。田口は経済学を構築するに際して人間の本性を「欲望人」として次の様に説明してみせた、「経済学者から人間を見たところでは、人間といふものは利己心で成立ったもので、セルフ・インタレストの固まりだと斯う見るのである。……欲望を持って居るものである、飯を食ひたいという考、水を飲みたいといふ考、着物を着たいといふ考を持つて居るものである。」(九)と。儒教教学に接していた人々にとっては目から鱗が落ちるような定義の仕方であったと云えよう。そしてこの欲望のうちで最も基本的なものを田口は「生を保ち死を避くる」欲求であるとし、人間の諸活動、則ち「人為の現象」の究極的動因をここに遡らせたのであった。『日本開化小史』の論じたことの一つは、人類史の始まる「人間初代の時」においても「保生避死」だけはいかなる人間の中にも云はばアプリオリな「天性」として普遍的に存在していた反応であり、(一〇)歴史が進化し種々の異質的文化形態を開示していく場合でも人間はこの「保生避死」原理から足を離す訳にはいかないのであり、実は「保生避死」の多様な存在類型として歴史の進化の諸タイプが存在しているとすることであった。恰もいかなる進化段階の植物にも炭酸同化作用が共通であるようなものであろう。田口の立論はこの「保生避死」の上に立てられたのであり、総てはここから出発した。

尚、田口はこの「保生避死」を語る場合には、詳しくは三節で紹介するように、それが人間存在の根本に存在する「事実」であることを強調し、あくまでも功利主義的、実証主義的に把握していたのであって、そこに「善悪曲直」の如き道徳的判断を下すことを戒めていた。しかし、そのような「事実」に対する絶対的な尊重の態度を示したこと自体が田口の内面を支配していた一つの価値認識を表わしていた。人間性に関するこの様な客観的事実性を強調した

ということは、裏返せばこの事実を無視しておいて「教則」「訓言」等の当為規範道徳を押しつけることの偽瞞性に対する強烈な否定の精神が働いていたからである。ここに徳川幕藩体制臨終期の鬱結した士族社会の生活体験が生かされていたと考えられる。

田口が「教」「訓言」の中にイデオロギーの臭みを嗅ぎとり、その虚偽性の皮を露すのにいかに熱心であったかは、既に伊豆公夫も論じていた通りである。(一一) 例えば「孝」「悌」の徳目に対しては「天の孝や悌の素と此私利心と同一なり。」(一二) と云うのであり、「忠義の教」については「忠義の教何故に利益ありし乎、是れ則ち当時の制度は封建制度にして君臣の関係を以て社会を立つる折柄なれば、忠義の教は最も之を維持するに適せばなり。」(一三) と声を張る。今や田口は「教則」道徳それ自体の存在に対して懐疑的になっていた。いかに有徳で飾られた人間行動といえども一皮むけばエゴイズムに発しているに過ぎず、教条・徳目というものは統治者などそれを使用する者にとって利益があるからという功利的判断にかなった代物に過ぎないことを暴露して止まない鼎軒であった。この点田口も亦他の啓蒙思想家同様、封建遺制の除去に戦闘的に参加していたのであった。

田口は「人為の現象」を分析していつて終に「保生避死」という究極動因にまで辿りついた。それはいかにも「数学的の脳髄」(一四)（山路愛山）と呼ばれた田口に相応しい理論的営為であった。そしてこの理論的営為によって、徳川幕藩体制という身分制社会を突破する体験のなかから、たとえいかにバタ臭い理論に負うことが大きかったとは云え、国家、社会の基礎を「利己的人間」にまで解体することが実現されたのであった。

田口はここで従来の「教則」と呼ばれる砂の様な基礎に代えて如何なる条件下でも変ることのない揺ぎなき「保生避死」の堅牢な人間性の磐石の上に「社会」を立てようとした。曰く「社会の立つは教則に因りて立つにあらず人民

生存に因りて立つなり。君主諸侯にして其民の生存を害せんには、不忠不義の名を侵すも反旗を掲ぐるものあるは社会の理なり。故に此教則は人民生存に勝つ能はず」[一五]と。つまり「教則」が「生存」に及ばないというのが「社会の大理」である、人間界に貫徹する客観的法則であるということを自明の真理として断然と主張したのであった。この様に田口の思考様式では「社会」は「生存」の人間性の上に「構築」されるものとして観念されるというよりも、むしろ実証的法則の示す所に従って「生存」の原則に忠実なる状態にまで「社会」を「復元」するという発想形式をとっていた。この「生存」に絶対の優位を認め、一人の「私」の「生存」の為には君主に反逆するも法則、「理」の導くところであるとする認識は、社会を一大有機体と看做してその一部の人間の犠牲を要求する社会観（例えば加藤弘之のそれ）の類とは絶対に対立する論理構造を備えていたことは明らかであろう。「教則」を否定し「生存」の上に人間理解を求めたことによって田口は、内容としては封建教学が押しつけていた徳目主義的人間規定からの脱皮と、思考論理としては人間本性を経験観察に由らないで形而上学的に解釈する思惟形式からの解放を得たのであった。[一六]

人間論をこのように経験的実証主義的に非道徳論的に規定し、そこに発見された「保生避死」を欲求する「利己的人間」を提示することは繰返すように時代画期的な事であったし、同時代人にとってはショッキングな事柄であった。しかし田口は当時非難[一七]を浴びたように、これを以て直ちにエゴイズムの恣意的な奔流を必然的現象として許容し、その結果政治的、社会的アナキーをもたらすことを承認していた訳ではなかった。田口は田口なりに「エゴイズムの制度化」の問題に取り組んでいた点を見逃してはならない。

その理論とは「保生避死」に始まって「貨財」の増殖を企て「平民社会」の秩序を確立する筋道をとるが、ここには古典派経済学、就中、アダム・スミスの影響が強く働いていたと思われる。スミス[一八]同様田口も亦エゴイズムを心理

学的事実としてとらえた上で、政治を極少化し経済を中軸とした社会モデルを想定したのであった。

今いちいち典拠を挙げることは省略するが諸論の中で田口が語っていたことはこうである。即ち、「保生避死」を欲求する人間とは「私利心」の主体であり「自愛の拡大」を求めて行動するものである、そして「自愛の拡大」とは、則「貨財」の増殖という経済活動に他ならず、これは「労働」によってのみ実現される。この「労働」の公正さが保障された社会制度が「平民社会」と呼ばれ、その実在性は当為必然的なものとして想定されていたのであった。この様な鼎軒の社会論の行論形式の特色と問題点を政治学的に以下で検討することにするがその前に彼が提示した「平民社会」及び究極的な社会の理想状態について述べておこう。

「平民社会」は「貴族社会」の対立概念として設定されていたものであったが、その区別の指標は「労働」の様態におかれていた。つまり「平民社会」と云う場合には、㈠労働当事者が自己の労働に対応した公正な所有が保障されている社会、㈡社会の指導者を正当化する根拠を労働から由来させる社会、㈢平民の需要が推進力になって社会が進歩していく社会、などの内容が念頭におかれていたが、就中強調されたのが第一点であった。「労働するものをして其産物を得せしめ、労せざるものをして財を得るなからしむるの制を立つるは、社会永遠の目的とせざるべからざるなり。」[一九]と語る。或はまた「蓋し人の生まるゝや果して平等なるや否や、余敢て之を言はざるなり。……然れども吾人の自ら労して作る所は、必ず他人の有にあらざるは理の見易きものなり。故に若し社会の組織をして完全ならしめば、其の開化の度こそ高底あるべしと雖も、社会必ず自ら労せずして他人の労に拠りて逸楽する人なかるべきなり、余今仮りに之を称して平等と云う」[二〇]と述べ、更にまた「蓋し人の生まるゝや果して自由なるや否や余得て知らざる也。然れども人間社会、幸福の存する所は人々自ら其労に因りて衣食して而して妄りに其産を奪はれざるにあるや知

るべきなり。」[二二]と論じた。実証主義者田口にとっては「自由」や「平等」が果して自明の権利として存在しているか否かといった形而上学的設問自体には興味がなかった、むしろこの問題を実証的に眺めるならば「天の人を生ずる稟賦同じからず」[二三]という事実を認めざるをえなかったのであったが、しかし人が自ら労働して作ったものは他人の有に帰する理屈は認められないということだけは、明々白々な真理であると思われたのであった。この事実が保障されるのが「平民社会」であった。田口の人間観、社会観に秘められていた正義感がここに表明されている。つまり彼の価値の根本範疇が、はからずもこの実証主義者の口から「永遠の目的」として、当為命題として語られていたのであった。それは当為規範命題というよりも謂ば当為法則命題とでも称すべき形式のものであった。

尚、田口はこの「平民社会」の具体的イメージを徳川社会の体験から導出していたと考えられる。『日本開化之性質』のなかで鼎軒は徳川社会を労働主体が公正に遇されなかった社会とした。そこでは「労せざる者」が統治支配層を構成し、有閑人達が「漢学」「和歌」「多妻多妾」「幇間絃妓の類」に溺れ、他方労する者は「下民の末に於ては妻なく児なく、終生労役して而して飢餓を免がれざる」状態におかれている。つまり典型的な「貴族開化社会」を見出していたのであった。[二三]「平民社会」を性急に唱導したのはこれに対する反撥に由来していた、何故なら明治の今日においても、「日本の人民をして累々乎として喪家の狗の如き」[二四]みじめな姿に陥れたのが徳川「貴族開化」であったからであり、この余韻が「日本の政事に浸染」して維新の革命を「最も恐るべき貴族の開化」に逆転させることを警戒していたからである。[二五]この一つを取り上げても田口の言論活動は歴史意識に富んでいたことが解るであろう。

更に田口はこの「平民社会」の極まった所に、人間社会のあるべき状態、「社会正状(マコト)の状態」を次の如くイメージしていた。曰く「利害得失の他人に関せざる以上は、善にも悪にも非ず。見よ見よ商人を以て善人とは云ふまじ、農業

を以て悪業とは評すまじ、而して社会の最も務むべきは、此善とも悪とも評せざる所業に存するなり」[二六]と。又曰く「人々善を為さず、人々悪を為さず、善悪正邪の教長く跡を人間社会に絶たん、人間社会たるもの宜しく此の如くなるべし、是れが人間社会の正状と称する所也。」[二七]と。「教則」を排して人間を心理学的事実に基く「私利心」の持主と規定することから始まって、この実証的事実法則を完全に制度化させようとした田口の当為法則命題の帰結がこれであった。エゴイズムを出発点としながら人類の無記（イノセント）の状態に達するこのオプティミスティックな社会観は田口の用いた行論の特質を象徴するものであった。

ここで田口の社会論の行論形式の特質と問題点を検討しておこう。最大の特質であり問題点であるのは田口の理論が右に見たようにオプティミステックな社会論であったということである。かつてホッブスは人間を「自己保存の本能」と「予見能力」とを備えた存在と規定し、その故に人類には不断の恐怖心と闘争状態が付きまとわざるをえない悲惨な状況を想定し、ここから強力な国家論を構築した。ところが田口では同様の「保生避死」から出発しながら楽天的な社会論が結論されただけで、国家論は現われなかった。これは田口が人間の予見能力を無視していたからではない、彼も亦「想像力」の作用を歴史の中に描写していたことは『日本開化小史』を読めば明らかである。しかも、田口はポスト進化論の時代の人間であって生存競争の問題をも視野に収めていたのである。それにもかかわらずオプティミステックな結論に達したのは何故か。我々はその理由を、田口がスミス流の自由経済学に負うていたこと、特に社会の最少単位を単独人においたこと、労働価値説、進歩史観などに、又消極的には政治学や政治権力観が欠落していたところに求めうると思う。

先ず「経済学」の根本を説明して、「詰り経済学といふものは人の自愛心、自利心、自ら利するという事を根拠に

して立つて居るものであります。此自利心と云ふものを修身の基礎とまで論じないが、経済上に現はれて居るところの総ての現象には、人が自分を利するといふ事が根拠になつて居ります。[二八]」と田口は語った。これは我国でも学としての経済学が道徳学から独立する第一歩を踏み出したことを意味していたが、又同時に田口においては「利己的人間」の分析が専ら「経済学」によって行なわれることを意味していた。田口の「経済学」は前述したように西欧経済学者のものよりも広義であって、「貨物」のみならず「人為の現象」全てを対象とするものであったから、政治現象もまたこの経済学の範囲に内包されてしまうのであった。事実田口は「凡そ人類の世に発成(ママ)せしもの皆経済現象なり。政事々務亦た人為の所発に属するものなれば、経済現象の一部たらざるをえず[二九]」と云っていた。さてこの事は、田口の「経済学」が政治学を内包するまでに政治化する可能性を与えたが、又同時に田口においては政治的諸現象が全て経済学の中に解消され、非政治化されてしまう可能性をも生んだ。そして田口の場合は、明らかに後者の経過を辿ったのであった。それを典型的に象徴する一文を示そう、曰く「エコノミーの社会から言へば……人間社会は競争で成立つて居る、故にエコノミック経済学といふものは利己心に成立つて居る。……饑ゑて食を求め、渇して飲を求むるといふ考のある人を利己人ある人、則ち需要を持つて居る人、それが則ちエコノミック・メンである。[三〇]」（傍点は引用者）と。つまり人間社会には競争があり、饑餓を満そうとする利己心の闘争があることを是認するにもかかわらず、それらは「則ち需要」の問題に、云いかえれば非政治的なスマートな経済問題に置き換えられてしまうのであった。この点でも田口が祖述したのが政治を極少化し経済を極大化するスミス流経済学であったことを忘れてはならない。

次に田口が社会の最少単位として一人の「単独人」を想定していたことも、オプティミスティックな社会観を成立される一要因となった。鼎軒はロビンソン・クルーソーの如く、単独人が自然外界に対して労働を為す時に「人為の

現象」は発生すると考え、[三一] これを人間の社会活動の最小モデルと考えたのである。つまりここでは所謂「自然との代謝過程」[三二] が想定されていた。複数人による人間関係が前提となるゾーン・ポリティコンの人間理解はなされず、単独人ホモ・エコノミクスの人間が規定される。従ってここでは人間の共同体的側面が掌握されないことは勿論、人間対人間が対決する闘争的側面すらも十分には理解されない。つまりヨリ大きな社会集団といえども単独者が量的に多数集合したものに過ぎないからである。田口も「分業」とか「競争」とかの存在は認めていた、しかしそれも横の人間との競合関連に着目した訳ではなく、自己のゴールを追う上での隣コースに出現した競走者のごときものに過ぎない、何故ならば人間の行動は究極的には単独人にとっては「利害得失の他人に関せざる以上は、善にも悪にも非ず」と看做された――つまり煮詰めれば自己以外は物であろうと人間であろうと彼の「生存」にとっては全て対象化されたる材料、「自然」として出現する――からである。ここには人間関係調整の学たる政治学は不必要なのである。かくして紛争は対人闘争にではなく対自然競争に読み換えられ、それは価値判断を超えた「経済の大理」すなわち需給と価格との自動調整される市場の法則か、「養成の地」すなわち進化論的にみた環境に対する適者生存の歴史的決済手段によって決着をつけられることになったのであった。

又、労働価値説を信奉していたことも彼の社会論が非観主義に傾かない原因の一つであった。「富とは何ぞや、日本人民労働して産する所の者皆是なり。」[三三] として「富」が「労働」に由来することを示した田口は、更に人間を規定して「それ人の世にあるや、自ら労して衣食住を作る者也。」[三四] という「生産人」を公理として設定した。この「生産人」の規定がある故に、先の「単独人」モデルも成立しえたのは云うまでもない。而もこの「労働」によって田口は「想像力」の問題すらも克服したのであった。「人心」すなわち想像力が、労働生産と結びつけば、「外物を制せん

とする機能」に転じ「平民開化」を促進するが、もし結びつかなければ富を浪費する「情」となり「優さ男、雅び男、色好み男」等による「貴族開化」を帰結させてしまう、[三五] 従って生産労働を公正に保持することを先ず実行しておけば「想像力」は開化の障害とはならなくなってしまうと考えたのである。

今一つ田口にオプティミステックな社会観を可能にさせたものとして進歩に信頼を寄せた田口の歴史観を挙げておこう。田口の開化史が「ヨーロッパを開化に導いた動因と歴史発展の法則が、基本的には開国までの日本にも貫いていることを挙証しようと」[三六] して執筆されたものであることは既に先学によって指摘されたのであり、田口は『日本開化小史』においてはっきりと「凡そ開化の進歩するは社会の性なることを知るべし」[三七] と述べている。だがここでこの進歩史観が社会論の楽天性を保証したと直ちに結論づけるつもりではない。我国歴史が本当に進歩しているかどうかは、田口自身がこの本で確認してみたがっていた――云い換えればそれ程までに不確かで信じにくい――事項であった以上、そこから即座に楽観性は導かれないからである。しかし田口がその論証過程で次の様な議論をしていたことは十分に注目されよう。即ち、田口は歴史の中に単線的で常に上向きの進歩の法則を検証していた訳ではない、確かに巨視的に云えば歴史は進歩していると云うけれども、微視的にみた時には進歩と退歩とが交錯しており、内部に発生する闘争や波瀾の契機の実在を見逃していなかった、ここで重要なことは、田口が経済学では闘争を「競争」に解消していたのに比し史論中ではこの「波瀾」をば積極的に評価していたことである。「足利氏委世の浅ましき有様よりして、徳川氏の燦爛たる開化を発せり」[三八] という逆説を歴史に読みとり、又「社会の自療性」と題した一種の史論の中では社会内部に自発的に下から起る「波瀾」こそが社会を「貴族開化」の堕落から自療させる力であることを認めていた。[三九] このことと先にも紹介した「君主諸侯にして其民の生存を害せんには、不忠不義の名を侵すも反旗を揚ぐる

ものあるは社会の理なり」という言葉を並べてみよう。田口は明らかに「平民開化」を促進する歴史の進歩の動因が、自己の「生存」を自らの手で入手しようとする「波瀾」によって、この個人の主体的活動によって、生れてくることを認識していたことが解ってくる。つまり「波瀾」が起る必然性まで考慮するならば、「波瀾」こそが「平民社会」へと歴史を近づける推進力であることになる、従って「波瀾」あるいは闘争は「平民社会」の秩序に対する非合理的な攪乱要因としてではなく、逆に「平民社会」の到来に対する必然的且楽観的な見通しを保障する要素たりえたのである。一言でいえば、「平民社会」論では、――少なくとも平民社会が成立するまでの時期では――「波瀾の制度化」が理論上出来ていたのである。この柔構造の史観が楽天的な社会論を可能にしていた。

以上、オプティミスティックな社会論を可能にさせた田口の理論上の理由について論じてきた。しかし、またこのオプティミズムこそが田口における政治意識の不在という問題点をなすものでもあったのであるまいか。このことを次に触れる。

まず、「保生避死」から始まった田口の功利主義的判断における衝動（パッション）と利害（インタレスト）との問題がある。人間性を「保生避死」の心理学的規定にまで遡らせた場合、各自の「生存」は各自の手において、その判断も手段も、選択され決定されることとなるから、そこには政治的アナキーの到来が予想されることとなる。森戸辰男が「宛然クロポトキン」を田口から連想したのも偶然ならぬことであった。ここに功利主義にまつわる最大のアポリア、秩序論理構築の問題が生じる。その時、快楽は計量可能であるとするのがベンタムらの解答（四〇）であった。確かに、平静な、制度化された社会では、エゴイズムにまつわる功利的判断も冷静な計算づくの利害問題として登場し、ヨリ経済的な問題となる。しかし不安定な、状況化した社会ではそれは主観化され生々しい衝動の問題となり、その限りでヨリ政治的色彩を帯び

る。あのフランス革命のなかに「豚の如き大衆」を発見して身震いしたエドモンド・バークが功利主義に対して批判的であったのは、この衝動と利害との対抗関係をそこに見出していたからであった。[四一] 田口の場合、「惻隠の情」などの言葉を使って衝動の側面を問題にしたことも僅かにはある。しかし圧倒的にエゴイズムは計算の対象となりうる利害に還元されて理解されていた。この経済合理主義的な利害打算を闘争や波瀾の奥に貫徹する原理と考えることは、場合によっては確かに熱狂して判断力を失った主張に対して有効な政治判断を可能にすることがある。例えば日露開戦時の世論に現われたロマンチックなジンゴイズムに対して、田口は我国の利害という国家理性を貫いた場合等がそれである。[四二] しかし又、高度に状況化した政治環境に対しては、政治の論理を持ち合せぬが故に無力となるという限界を持っていると考えられる。人間の非合理性を理解しないことは常に両面的に機能するのである。

田口の政治観は「政事上の区画」と「経済上の区画」を峻別した上で前者の後者に対する干渉を排すること[四三]を最大眼目とした、謂る政治を極少に経済を極大にする、典型的な自由経済論者の見方であった。つまり妨害の妨害としての政治の役割を強調したのである。しかも興味深いのは歴史上この政治の縮少と経済の拡大が実現されてきていると考えていたことである。政治権域はかつて「生殺与奪の大権」を握っていたが、「群」「諸侯」「国」へと統治領域が拡大するに反比例して政治権力は「実に減縮せしなり」とされる。他方経済権域は「五大州は悉く経済上の共和国」に成長したと云うのである。[四四] 田口は「箇人主義にして万国社会主義」[四五] なる経済秩序をそこに認め、「国家」を理論から退場させた。この見解はリアリズムを欠いている。確かに政治的単位が拡大することは同時に非政治的部門をその中に生んだには違いないが、巨視的にみれば政治制度は桁違いに強力になっていた筈である。又政治が経済や宗教から分離することは、権力装置として一層と専門純化されることを意味していたから、そのことを権力の消滅と考える

のは誤解であった。あの西欧列強が虎視眈々と東洋諸国の中で形勢を窺っていた時代に、この様な楽天的見解をなぜ田口は信じつづけていたのであろうか。この点は後述する彼の法則観の問題とかかわっているが、ここでは次の指摘だけを行なっておこう。

一つには田口のヨーロッパに対する危機感が、その「文明」に対して敏感に働いたが、その「政治」に対しては鈍感であったからではないかと思わしめるが、多分そうではなかったろう。田口もまた我国の独立を第一に憂うあの屈強な明治のナショナリストの一人であった。(四六) むしろ屈強なナショナリストでありながら西欧文明の普遍性を信奉している田口が直面した矛盾がここに現われていたと云うべきであろう。田口にとっては、明治政府が経済に干渉して保護貿易政策（田口のいう「マルカンティズム」(四七)）をとることに反対すること、経済を非政治化することこそが、パラドクシカルにも十分に自覚されたる政治的、そして国家論的主張だったのである。これによって「労働」の公正を制度化した「平民社会」がヨリ実現し、それによって我国の独立も強化され得ると考えていたからである。「抑々自由交易論者は、決して国家を無視せず。……其の論を以て国家に利ありと信ずればこそ、其の国に行ふべしとは論ずるもの(四八)なり。」と田口は自己の立場を表明した。しかし、その時信奉した自由交易論に従うならば「国亡ぼるも(ママ)経済学は之を憂えず」(四九)といわざるをえないのでもあった。而も田口はこの二命題を形骸化することなしに信念としていたのも事実であった。ここに田口の矛盾があった。もっともこの矛盾はもし日本が自由経済学によって立国し得たならば解消していた矛盾であるが、現実の我国は「市民社会」の成熟を待てずに強大な大日本帝国へと成長していったのであるから田口の抱えた矛盾は解決されることがなかった。ここに田口の言動を、悲劇的、ないしは戯画的悲劇にした原因があった。この為に具体的政治現実に面する毎に田口は自己の理論の上にも、政治判断の上にも苦慮を背負い込まね

ばならなくなるのであった。

以上で「保生避死」から「平民社会」にいたる行論のなかに田口の価値範疇を探ぐりながら、その特色と問題点を追求する試みを打ち切る。ところで「生産労働」を基軸概念にしながらエゴイズムと社会制度とを統合した田口の理論構想は、恰度当時の我国が対面していた課題――永き身分制社会の習俗制度から蟬脱して「近代国家」を形成するために、その基盤たるべき「生産力」を造出すること――と対応していたと云えるであろう。もし「近代化」、「資本主義化」の経済的側面が「社会的剰余労働が生産者以外の経済外的努力によって収奪消費されるのではなく生産者自身（生産を中心とした流通、分配にたずさわる諸階層を含む）によって消費、畜積され、そのことによって、生産者が富裕になり、畜積された剰余を生産それ自体の拡大のために投入することができる体制」(五〇)を建設することとして定義出来るならば、「平民社会」に示された田口の構想はまさに「近代的」、「資本主義的」なものであった。

しかし政治思想史的にみて一層興味深い問題は、この「生産労働」を軸としてエゴイズムと社会制度を統合した田口の試みが、従来からの共同体的人間関係及びその議論を、「利己的人間」にまで解体したものであったこと、及びその利己人を以て田口なりに「エゴイズムの制度化」を行なったことであった。前者の問題はその理論的認識にまで達しなかったとしても明治の世間に実態として出現したのであったが、就中後者の点は以後放置されっぱなしであったことを想起せよ。

周知の通り明治二十年代に成立をみた我が「天皇制国家」のなかにおいては、個人のエゴイズムに対する正当な認識も合理的な制度化も遂に実現されることがなかった。このために近代日本におけるエゴイズムは常に問題的存在をなしていたのである。つまり一方ではエゴイズムの問題は「国民道徳論」「淳風美俗」などの教学イデオロギーによ

って陰微なる存在に押しやられていた。攻撃用語としての「利己主義者」のレッテルはこの様な官製風俗が〝常識〟として生活を支配していた状況においては、各人の内面的動揺を誘う絶好の手段となる。だから国家権力はこの言葉を最大限に利用し、濫用して個人の権利意識を内面から撃破しながら「滅死奉公」という巨大なエネルギーを調達し得たのであった。他方、エゴに居直ったのが「欲望自然主義」であった。しかしこれに関しても、よく知られるように、居直りながらも、当人が成功し出世の階段を登りはじめるに従って「お国のために」のスローガンを以て倫理的装飾を施していったのであり、国家の側も実はこの私利追求活動を黙認し、或いは支援することによって「大日本帝国」の運転動力と要員を確保してきたのであった。しかし、この種の「実業の日本」のなかにも「エゴイズムの制度化」が実現していたとは云い難い。むしろルールなき「世渡り」の様相（例えば内田魯庵の『社会百面相』明治三四年をみよ）はアナキーを招来する危機を常に国家に感じさせていたのであった。

このような近代日本のエゴイズムの状況を考えてみるとき、田口卯吉がそのなかで、明治維新という欲望が教学から解放され、習俗は瓦解し、価値体系の巨大な空白が生じ、人間の生存や実存の問題が関心の対象となるという空前の体験を背景としながら、たとえ如何に舶来理論を借用したとはいえ、たとえ如何に現実政治に対する感覚が欠けていたとはいえ、素朴ながらも理論レベルにおいて「エゴイズムの制度化」を試みた努力は、貴重なものであった。明治初期には存在していたこの種の問題提起は明治国家のなかで程なく消散していった問題であった。さて次に我々はこの田口の理論に現われた思惟形式の特色を検討しなければならない。

（一）田口卯吉、「経済学の定義」（『全集』第三巻、三一八頁以下）。

（二）長幸男、「解説」（『現代日本思想史大系』11　実業の思想　筑摩書房一九～二五頁）。

(三) 田口卯吉、前掲論文三一九頁。
(四) 田口卯吉、『自由交易日本経済論』(『全集』第三巻七頁)。
(五) 同書五頁。
(六) 同書五頁。
(七) 家永三郎『近代精神とその限界』二二八〜二三〇頁。
(八) 福沢諭吉『文明論之概略』岩波文庫版五一頁。
(九) 田口卯吉、「経済学は心理的科学なり」(『全集』第三巻三八九頁)。
(一〇) 「人間初代の時に当て、多く接する能はず、其心豈能く長ずべけんや。然りと雖も生を保ち死を避くるは、智の広狭を問はず、情の高卑を論ぜず、総ての動物に通じて違はざるの天性なり。」(田口卯吉『日本開化小史』岩波文庫版二四頁)。
(一一) 伊豆公夫、前掲書、一二〇〜一二一頁、一二九〜一三〇頁等。
(一二) 田口卯吉、『日本開化小史』三五頁。
(一三) 同書一九八頁。
(一四) 山路愛山、前掲論文、四二二頁。
(一五) 田口卯吉、『続経済策』(『全集』第三巻一二一頁)。
(一六) このことは近代ヨーロッパにおける人間解釈の歴史的展開が次の如く整理されていたことを想起させる。『道徳情操論』の中でアダム・スミスが受け入れた人間解釈の一つの系統は、ベイコンに始まり、ホッブス、ロック、ヒュームを経てハートリィの連想心理学を媒介として一九世紀のベンタム、ミルの功利主義に流れてゆくところの、人間の利己的本性に関する学説であるといわれる。これらの立場に共通するところは、人間本性を、中世以来の伝統たる形而上学的解釈から切りはなし、これを改めて心理学の基礎の上に組み立て、またそこから人間の社会的行動の準則や徳目を考察して行かうとする立場である。人間の本性としての「利己心」seif-interest、「自愛心」self-love 等がこれ故にこの立場にとっては、重要な地位を占めてゐた。」(大河内一男『経済思想史』(上)六三〜六四頁)。
そして事実においても田口は経済論をアダム・スミスに、史論をスペンサーやバックルら「功利主義の思想的系列」に負うていたのであった。

（一七）「私利心」を堂々と肯定してみせる田口の人間観に対しては多くの同時代人からの詰問を受けたが、特に宗教家と国家主義者とからの非難が強かったという。これに対しては「個人主義とか或いは自愛とかいふ事はどうしても世の中に評判が宜しくない」ことをボヤキながら、これが「人事」、「社会」の「基礎」を成す「真理」であるという信念に導かれて一歩も妥協することがなかった。（「自愛」明治30年『全集』第八巻）。

（一八）アダム・スミスの人間観については、大河内一男、『スミスとリスト』昭和29年改訂版　九〜一三頁、六〇〜六七頁、及び前編の第二章。

（一九）田口卯吉『日本開化之性質』（『全集』第二巻、一三七頁）。

（二〇）同書一二九頁。

（二一）同書一三一頁。

（二二）田口卯吉『自由交易日本経済論』（『全集』第三巻一四頁）。

（二三）田口卯吉『日本開化之性質』（『全集』第三巻一三一〜一三四頁）。

（二四）同個所。

（二五）田口卯吉「誰れか社会改良を以て至難の業なりと云ふ」（『全集』第二巻五一九頁）。

（二六）田口卯吉『日本開化小史』五三頁。

（二七）同書一〇一頁。

（二八）田口卯吉、「自愛」（『全集』第八巻四六頁）。

（二九）田口卯吉、「経済世界」（『全集』第三巻一四六頁）。

（三〇）田口卯吉、「経済学は心理的科学なり」（『全集』第三巻三八九頁）。

（三一）「若し人一人を以て其欲する所を労作し其好む所を講究するも、人為の現像は必ず宇内に発すべし。」（『自由交易日本経済論』、『全集』第三巻七頁）。

（三二）福田歓一、「政治哲学としての社会契約説」（南原繁先生古希記念『政治思想における西欧と日本』（上）三二頁）。

（三三）田口卯吉、『自由交易日本経済論』（『全集』第三巻一五頁）。

（三四）田口卯吉、「経済学は何をする学問なるか」（『全集』第三巻二〇一頁）。

(三五) 田口卯吉、『日本開化小史』一〇三～一〇五頁。及び四一頁。

尚田口はこの想像力と生産の因果関係について次の様な公式を立てて整理を試みていた。曰く「物質的の現象が斯く進歩したるが故に、心理的の現像が斯く進歩したり、心理的の現象が斯く退歩したるが故に、物質的の現象が斯く退歩したりと云ふ体裁」(「史癖は佳癖」明治24年『全集』第一巻六七頁)。即ち、歴史の進歩の契機は「物質」つまり剰余価値から、退歩の契機は「心理」からつまり想像力を浪費するところから始まるとみていたのは興味深い。しかし本文にも述べたように「心理」――たとえいかに機械論的にせよ――にも歴史を進退させる能力を田口は認めていたのであるから、伊豆公夫のように田口の観念論を無視することは誤解であろう。

(伊豆公夫前掲書一〇七～一〇九頁、一一五頁、一一七頁、一三二頁)。

(三六) 丸山真男、前掲論文、二七八頁。

(三七) 田口卯吉、『日本開化小史』一九三頁。

(三八) 同書、一八九頁。

(三九) 田口卯吉、「社会の自療性」(『全集』第三巻、一三三～一三七頁)。

(四〇) 関嘉彦「ベンサムとミルの社会思想」(『世界の名著』38ベンサム、J・S・ミル二七頁)。

(四一) 「バークは人間の衝動(passions)がしばしば人間の利害計算(interests)を圧倒することを示して、前もって堅牢な功利主義的保塁を破壊するのである。」

(Alfred Cobban, *EDMUND BURKE and the revolt against the eighteenth century*, 1929. p. 78)。

(四二) 田口卯吉、「対外国是」(『全集』第五巻)。

(四三) 田口卯吉、「商業共和国」(『全集』第三巻一三八頁)。

(四四) 田口卯吉、「経済世界」(『全集』第三巻一四四～一四五頁)。

(四五) 田口卯吉、「経済学的心理的科学なり」(『全集』第三巻三九〇頁)。

(四六) 「自由交易を行ふも、決して国体に害なし、余輩自由交易論を主張すと雖も、若し万一の事あらば、鈍しとも此筆、狭しとも此の紙を以て、日本帝国の名誉を守らんとするの覚悟なり。」(田口「自由交易論」『全集』第三巻一九三頁)。

(四七) 例えば『経済論』(『全集』第三巻)にみえる。

（四八）　田口卯吉、「自由貿易は国家を無視せず」（『全集』第三巻二七四頁）。
（四九）　田口卯吉、「学問の性質」（『全集』第三巻一一七頁）。
（五〇）　長幸男、前掲書、一二頁。